
モノクロの花

折原とーゆ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モノクロの花

【Zコード】

N4435BA

【作者名】

折原とーゆ

【あらすじ】

世界が魔法というものを公表して早、かれこれ約100年くらい。世界のあちこちに魔法使いを育てる施設ができた。その一つ聖エルフィーナ魔法学校日本支部。そこにバリバリ日本人、桜井春木という少年がいた。彼は入学早々一人の少女と出会った。その少女との出逢いは、少年の人生を大きく変えていく。

それはモノクロのように近くにあって交われない。

春、それは入学の季節。

そんな訳で入学式、まあ始まつて10分くらいたつているんだが・・・
・そこは気にするな。

すると一人の老人がしゃべりだした

「入学おめでとう！生徒諸君」

そしてその老人が言つた。

「ワシはここ聖エルフィーナ学園の校長アスター・ウルヴィリアジ
や、よろしくの」

どうやら校長先生のようだ。

「まあそんな事はさておきみんなだるいじやろ。だが安心せいもう
少しの辛抱じや」

なんて優しい先生なんだ。ん？なぜだ？田から汗が出るぜー！
「んー」

おや校長が何かを考え始めたようだ。

「もうやめようか」

いやいや！確かにめんどくさいがもう少しちゃんとやろひづざ。

「「「「「「」・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

ほら～先生たちがあきれ顔になつた～言わんこいつちやない、口頭で
言つてる訳じやないが・・・・・・・・

「では解散！」

解散しちゃつたよ。あ～あ

こんな感じでグダグダを超越して約13分の入学式が終わつた。

序章（後書き）

どうせ折原と一緒にします。

新作です

思ひつきです

それと誤字脱字がある場合、「めんね」と

見てくれる嬉しさです。

始まりの少女

聖エルフィーナ魔法学校日本支部。

ここは日本にある魔法使いを育成する専門学校で小、中、高、大が混ざっている。豆知識つて訳でもないが一応は日本で一番大きな学校になっている。

この学校に通つている生徒の人数は総勢約3000人。教師だけでも200人はいる、結構大規模な学校だ。

そんな聖エルフィーナ魔法学校日本支部に念願叶つて俺、桜井春木は入学することになりました。ヤツフー！ちなみに今は、現在進行形で教室に向かっている。

「着きましたここがあなた達の教室です」「どうやら着いたようだ。

「では、このクラスのメンバーを選抜します」選抜！？スゲエー魔法思ったよりスゲエー、スゲエーけど一体どうやって選抜するんだ？

「では行きます」

するところこの担任の先生であらう人が選抜を始めた。目を閉じ静かに瞑想のような事を始めた。魔法つて案外地味だな。

俺がそんなことを考えていると、チリン、チリンと鈴の音が聞こえた。いつもなら特に気にも留めてないが今日に限つて何だろう心が洗われるようだ。

「はあい皆さん目を開けてください」

おつと、危ない、危ないもう少しで寝てたぜ。俺はごく普通に目を開けた。だが普通では、なかつた。しかし普通ではないのは自分ではない景色だつた。

「えつ？」

イカン、イカン、思わず声に出してしまつた。俺は、慌てて口に手を当てた。だが驚かないほうが不思議だぜ、何だつてそこは、教室

内で俺は、椅子に座っていたのだから。

時を同じくして中等部と高等部の境目付近。
一人の少女が歩いていた。

その少女はまつ白いワンピースを着ていた。
その少女は靴を履いていなかつた。
その少女の髪は美しい銀髪だつた。
その少女の手には小さな傷があつた。
その少女の首には十字架がかけられていた。

なんやかんやで登校日初日は終わつた。

だが収穫はあつた。担任の名前が淡島小鳥という名前だつたこと。
先生が使つたのはいわゆる催眠術の一種だつた事。
俺らは学校をでてすぐの寮に住むことになつたこと。
まつ、先生が美人だからいいけど。明日からはクラスの奴らの名前
を覚えなきや！

俺は機嫌よく音楽を聴きながら帰つていた。聴いている音楽は、ア
ソシングだが。

やつぱアーヴィング最高!、 そう言わざるおえない俺的神曲を聴いていた。

そろそろ2回目の中へところで俺はそいつとであった。

そいつはまつ白いワンピースを着ていた。

そいつは靴を履いていなかつた。

そいつの髪は美しい銀髪だつた。

そいつの手には小さな傷があつた。

そいつの首には十時価が掛けられていた。

そいつは俺の真横を通り過ぎて行つた。

通り過ぎたそいつに俺は声をかけていた。

「ちょ、ちょっと待ってくれ」

もう後戻りはできない。 そう判断した。

するとそいつは俺の声に反応したのかこっちを向いて

「なに?」

一言返してきた。だから俺は、聞いてしまつた。

「あ、お前名前は?」

いきなり名前を・・・・・穴があつたら入りたい。

しかもお前よばわりだぜ、本当にやつてしまつたよ。

だが無視されるかと思ひきや以外にもそいつから返答があつた。

「私?」

また一言かよ。

だつたらこつちもなるべく一言で返すぜ!

「ああ」

だからなぜ上からなんだ俺のバカ!

だがそいつは、

「私は」

その少女は、

「セラ」

そんな事を気にしていかのよつて血ちをやりと召乗つた。

始まりの少女（後書き）

どうも折原とーゆです。

1話です。

感想お待ちしています。

それと誤字脱字がある場合「めんなさい」。

では次回

少女／友だち

セラと名乗った少女は、静かに俺を見つめていた。
そんな状況で俺は、

「そ、そ、うかあ～教えてくれてありがとな。じゃっ！」
激しく逃げるを選択していた。

情けないぜ俺。

というわけです逃走開始だ。

「まつて」

クツ！回り込まれたか！

その少女は俺を逃がしてはくれなかつた。

「な、なんだ？」

回り込まれたので一応は返事をしてみた。

だけどやっぱり気まずいな。

「というかこいつには気まずさというものがいいのか？」

俺が、そんな事を考えていると声をかけられた。

「あなた」

「ふえ？」

考え込んでる+突然だつたからマヌケな声が出てしまつた。
これは情けない。

だがその少女、セラと言つたか、まあこの際セラと呼ばせて貰おう。
そのセラが全くの無表情で俺に聞いてきた。

「あなたの名前は？」

俺が一人で勝手にテンパつた末に聞かれた質問だった。

「え？・・え？」

いや、まだテンパつてるか。

「あなたの名前は？」

2度繰り返すな！俺の纖細なメンタルがダメージを受けるだろ！

これ以上俺のメンタルライフが削られるので、とりあえず自分の名

前をセラに教えた。

「俺か、俺はな桜井春木だ」

しかし再び上から、どうしたんだ俺！

ついでに言つとセラの反応は

「そう」

冷たい。

そして氣まずさ再来。

うーむどうしたものか、俺がまたこの氣まずい空気をどう打破する

か悩み始めた時セラが歩きだした。

一步また一步確実に遠ざかっていく。

その姿を見ながら俺は何故だかとても寂しい気持ちになつた。

あの後何故さびしい気持ちになつたか分からぬまま俺の新しい住居に着いた。

ん？どうして寮の場所が分かつたかって？

それは、淡島先生がくれた学校と学校周辺の地図があるからや！

そもそもってここは学校外の周辺にある男子寮だ。

まあ突つ立つっていても何も始まらないから中へ入つてみた。

中へ入つてまず最初の感想は、

「機械多つ！」

驚愕したぜ、魔法学校エ・・・科学に頼りすぎだぜ・・・。

少しばかり夢が壊れた俺に一人組みの男子生徒が声をかけてきた。

「まあ落ち込むなって・・・俺も初めの頃は夢を壊されたから気持ちは分からんこともないからぜ」

「やうそぅ柿原君の言ひ通り元氣出せよ」

やさしい奴らだ。

「ああ、ありがとな」

俺は、瞬間的にそう思った。

そして言葉に出した。

すると二人組みの中最初に俺に声をかけてくれた方が自己紹介を始めた。

「俺の名前は、柿原当利だよろしく気軽に柿原か当利と呼んでくれ俺は、柿原と呼ぶ事にした。

次に俺に声をかけてくれた人が自己紹介を始めた。

「僕の名前は・・・名前はめんどくさいから水無瀬でよろしくなんか少し間があつたがとりあえず水無瀬と呼ぼう。俺も礼儀はわきまえてるからな自己紹介くらい分けないぜ! だつてつこさつきやつたばかりだからな。

「俺の、名前は桜井春木、呼び方は自由だよろしくな
よくできました! 俺。

とりあえず二人と握手した俺は、そいつらの特徴を覚える。

まず柿原は・・・ワックスのかかった金髪に、首元にある傷だな。

次に水無瀬は・・・明らかに染めたであろう青髪か覚えやすいな。

とりあえず俺は、柿原と水無瀬と共に寮に入ることにした。

この日俺は、友だちができた。

少女／友だち（後書き）

いつも折原と一緒にです。

とりあえず2話目です。

誤字脱字があれば」報告へださい。

では、また

感想お持ちしております

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4435ba/>

モノクロの花

2012年1月13日16時53分発行